

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

- 1 発生期の光学顕微鏡写真を別図 1 に示す。
正しいのはどれか。
a 胎生 3 週 b 胎生 5 週 c 胎生 10 週 d 胎生 15 週 e 胎生 20 週
- 2 正常な眼組織の組織像を別図 2 に示す。
部位はどれか。
a 眼瞼 b 瞼結膜 c 球結膜 d 角膜 e 網膜
- 3 45 歳の女性。5 日前から左眼の視野異常を訴えて来院した。視力は両眼ともに 0.1(1.2× - 3.00 D)。左眼に軽度の相対的瞳孔求心路障害がみられる。眼底は両眼ともに正常。視野を別図 3 に示す。
確定診断に必要な検査はどれか。
a VEP b 遺伝子検査 c 頭部 MRI d 多局所 ERG e ウイルス検査
- 4 67 歳の男性。3 年前に急に複視が出現し、その後改善しないと訴え、視覚障害診断書を希望して来院した。視力は右 0.6(矯正不能)、左 0.6(矯正不能)。視野は正常。Hess 赤緑試験の結果と障害程度等級表を別図 4A、4B に示す。
視覚障害診断の等級はどれか。
a 不該当 b 6 級 c 5 級 d 4 級 e 3 級
- 5 48 歳の男性。左眼の視力改善を希望して来院した。左眼前眼部写真を別図 5 に示す。
正しいのはどれか。
a 解熱鎮痛薬の服用歴を聴く必要がある。 b 涙液中総 IgE 検査は陽性になる。
c 副腎皮質ステロイド点眼は禁忌である。 d 結膜切除が有効である。
e 全層角膜移植の適応である。
- 6 65 歳の女性。両眼瞼の腫脹と複視を主訴に来院した。顔面写真を別図 6 に示す。全身的 Ga シンチグラフィで眼周囲組織以外に呼吸器や後腹膜組織にも集積を認める。
正しいのはどれか。
a 視神経障害は起こらない。 b 遅延型過敏反応が関与する。
c SS-A、SS-B 抗体は陰性である。 d 副腎皮質ステロイドは無効である。
e 腫脹組織には類上皮細胞肉芽腫を認める。
- 7 70 歳の男性。2 か月前から左眼の眼球突出を家族に指摘されていた。2 週前から左眼の充血と軽度の疼痛が出現したため来院した。視力は右 0.8(矯正不能)、左 0.7(矯正不能)。左眼の外転、上転制限を認める。左眼結膜の充血浮腫、両眼に白内障を認める。眼窩部 CT 像を別図 7 に示す。
診断はどれか。
a 涙腺炎 b 涙腺癌 c 混合腫瘍 d 悪性リンパ腫 e Langerhans 細胞組織球症
- 8 49 歳の女性。1 か月前から両眼の視力低下を訴えて来院した。視力は右 0.4(矯正不能)、左 0.5(矯正不能)。前眼部と中間透光体および眼底には異常はない。対光反射が直接・間接ともに遅鈍である。眼窩 MRI 脂肪抑制 T₁強調画像の冠状断と軸位断を別図 8A、8B に示す。
まず行うべき対応はどれか。
a 経過観察 b 副腎皮質ステロイド内服 c ステロイドパルス療法
d 眼窩放射線照射 e 眼窩減圧術

9 65 歳の男性. 3 か月前から徐々に右眼の充血を自覚し, 2 週前からさらに増悪し, 他人からも指摘されるようになったため来院した. 視力は右 1.0(矯正不能), 左 0.9(矯正不能). 両眼に軽度の白内障を認める. 眼底に異常はない. 眼窩 MRI 軸位断を別図 9 に示す.

原因はどれか.

- a 甲状腺眼症 b 上斜筋腫瘍 c 肥厚性硬膜炎
d 特発性眼窩炎症 e 内頸動脈海綿静脈洞瘻

10 65 歳の男性. 右下眼瞼の外反と下涙点を含む腫瘤に気づき来院した. 右眼前眼部写真と組織像とを別図 10A, 10B, 10C に示す.

診断はどれか.

- a 母斑 b 脂腺癌 c 悪性黒色腫 d 基底細胞癌 e 脂漏性角化症

11 10 か月の乳児. 右上眼瞼が下垂しているため治療目的で近医から紹介されて来院した. 顔面写真を別図 11 に示す. 治療方針を決定するのに重要なのはどれか. 2 つ選べ.

- a 顎上げ頭位 b 角膜反射 c 斜頸 d 斜視 e 注視

12 25 歳の男性. 右眼の異物感を主訴に来院した. 右眼前眼部写真を別図 12 に示す.

原因として考えられるのはどれか.

- a Human herpesvirus 6 b Human herpesvirus 7 c Human herpesvirus 8
d Human papilloma virus type 11 e Human T lymphotropic virus type 1

13 62 歳の女性. 右眼の異物感を主訴に来院した. 右眼前眼部写真と手術で摘出した組織を別図 13A, 13B に示す. 眼手術の既往はない.

正しいのはどれか.

- a 炎症細胞の浸潤を認める. b 周囲組織に癒着している.
c 壁は単層の細胞層からなる. d 内部は充実性の線維組織からなる.
e PAS 染色で染色される細胞を認める.

14 25 歳の女性. 両眼の視力低下を主訴に来院した. 幼少時より両眼の眼痛, 視力不良の既往がある. 右眼前眼部写真を別図 14A, 14B に示す.

この疾患で正しいのはどれか. 2 つ選べ.

- a 角膜浮腫を伴う. b 常染色体劣性遺伝である.
c *TGFBI* の遺伝子異常で発生する. d 角膜内の混濁はアミロイドである.
e 角膜移植後半年以内に混濁が再発する.

15 58 歳の男性. 1 年前右眼に全層角膜移植を受けた. 数日前からの右眼の充血と視力低下を主訴に来院した. 右眼前眼部フルオレセイン染色写真を別図 15 に示す.

治療はどれか.

- a 再移植 b 角膜搔爬 c 抗菌薬頻回点眼
d 抗ウイルス薬局所投与 e 副腎皮質ステロイド全身投与

16 53 歳の男性. 右眼の視力低下を訴えて来院した. 視力は右 0.4(矯正不能). 眼圧は右 15 mmHg. 眼底に異常はない. 右眼前眼部写真を別図 16 に示す.

確認すべきものはどれか.

- a 眼球打撲 b 赤外線曝露 c 放射線曝露 d 抗精神薬服用 e ぶどう膜炎の既往

17 別図 17A, 17B の 2 つの視力検査で差が出るのはどれか.

- a 弱視 b 視神経炎 c 初発白内障 d 末期緑内障 e 加齢黄斑変性

- 18 75歳の男性。右眼前眼部写真を別図18に示す。
診断はどれか。
- a 水晶体脱臼 b 毛様体腫瘍 c 脈絡膜剥離
d モルガニー白内障 e シリコンオイル注入眼
- 19 50歳の女性。右眼眼底写真を別図19に示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 夜盲を訴える。 b ERGは消失型である。
c X連鎖性遺伝形式を示す。 d CYP4V2遺伝子変異を認める。
e 視野検査で中心10度の求心性視野狭窄を認める。
- 20 生後4か月の乳児。左眼眼底写真を別図20A, 20Bに示す。右眼も同様の所見である。
眼底出血の原因で最も可能性の高いのはどれか。
- a 白血病 b Coats病 c 未熟児網膜症 d 被虐待児症候群 e 家族性滲出性硝子体網膜症
- 21 7歳の男児。学校健診で両眼の視力低下を指摘されて来院した。視力は右0.4(0.5×-0.25D), 左0.3(矯正不能)。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真およびOCT像を別図21A, 21B, 21Cに示す。左眼も同様である。
この疾患で正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 常染色体優性遺伝を示す。 b 黄色斑がみられる病型がある。
c ABCA4遺伝子変異を認める。 d ERGはnon-recordableを示す。
e EOGのL/D比の低下がみられる。
- 22 64歳の男性。右眼眼底写真とインドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図22A, 22Bに示す。
造影所見で正しいのはどれか。2つ選べ。
- a 硬性白斑による低蛍光 b 網膜下出血による低蛍光
c ポリーブ状病巣による過蛍光 d 網膜下新生血管による過蛍光
e 漿液性網膜色素上皮剥離による低蛍光
- 23 7歳の男児。学校健診で視力不良を指摘されて来院した。視力は右0.3(0.5×+2.50D), 左0.2(0.4×+3.00D)。右眼眼底黄斑部拡大写真を別図23に示す。
診断に有用な検査はどれか。2つ選べ。
- a 隅角検査 b 色相配列検査 c 母親の眼底検査 d ERG e OCT
- 24 18歳の男子。幼少の頃から暗い場所が苦手であったが、自動車運転免許を取得する際に夜の運転を心配して来院した。視力は右0.6(1.2×-1.00D), 左0.5(1.2×-1.25D)。左眼眼底写真を別図24に示す。
この疾患で正しいのはどれか。3つ選べ。
- a 常染色体劣性遺伝である。 b EOGが診断に有用である。
c ERGの杆体応答は正常である。 d 視野は正常であることが多い。
e 長時間暗順応後に眼底の色調が変化する。
- 25 25歳の男性。右眼の視野異常を主訴に来院した。右眼眼底写真を別図25に示す。
最も考えられるのはどれか。
- a 眼トキソカラ症 b 網膜つた状血管腫 c Coats病
d Eales病 e von Hippel-Lindau症候群

- 34 42歳の男性。数か月前から右眼の視力低下を自覚して来院した。頭部MRI画像を別図34に示す。
診断に必要な検査はどれか。
a 生検 b 頭部CT c 脳血管撮影 d 血液中抗GQ1b抗体 e 血液中可溶性IL-4抗体
- 35 29歳の男性。まぶたが下がるのを主訴に来院した。顔面写真を別図35A, 35Bに示す。
診断のために用いた点眼薬はどれか。
a チラミン b コカイン塩酸塩 c ジスチグミン臭化物
d フェニレフリン塩酸塩 e エドロホニウム塩化物
- 36 60歳の女性。2日前から突然の複視と両眼の眼瞼下垂を訴えて来院した。3週間熱発し、下痢も著明であった。視力は両眼ともに1.0(矯正不能)。眼位写真を別図36に示す。前眼部と中間透光体および眼底に異常はない。
診断に有用な検査はどれか。2つ選べ。
a 髄液検査 b アイステスト c テンシロンテスト
d 抗ガングリオン抗体 e 血清IgG4サブクラス定量
- 37 24歳の女性。健康診断で左眼眼底の異常を指摘されて来院した。眼圧は右14mmHg, 左15mmHg。初診時の左眼眼底写真とGoldmann視野計による動的視野測定の結果を別図37A, 37Bに示す。
正しいのはどれか。2つ選べ。
a 進行性である。 b 自覚症状に乏しい。
c ERGで異常を認める。 d 点眼薬による眼圧下降療法を開始する。
e 視神経乳頭の上鼻側に網膜神経線維の菲薄化を認める。
- 38 62歳の男性。開放隅角緑内障に対して上方から繰り返し線維柱帯切除術を受けたが眼圧のコントロールが不良であった。下方から緑内障手術を行った。眼圧は13mmHg。術後3日目の所見を別図38に示す。
今後注意すべきなのはどれか。2つ選べ。
a 角膜形状 b 前房深度 c 前房フレア値 d 虹彩色素沈着 e 角膜内皮細胞密度
- 39 76歳の女性。両眼に中等度の白内障を認める。眼圧は右18mmHg, 左17mmHg。右眼隅角鏡写真を別図39に示す。
隅角の開大の大きい順で正しいのはどれか。
a 鼻側>上方>下方>耳側 b 下方>鼻側>耳側>上方 c 鼻側>耳側>下方>上方
d 耳側>鼻側>下方>上方 e 下方>上方>鼻側>耳側
- 40 線維柱帯切除術の術中、術後写真を別図40に示す。
輪部基底結膜切開はどれか。2つ選べ。
a ㉠ b ㉡ c ㉢ d ㉣ e ㉤
- 41 11歳の男児。視力検査で右眼の視力低下を指摘されて来院した。視力は右0.3(矯正不能), 左1.2(矯正不能)。2年前野球の練習中、右眼にボールが当たった既往がある。右眼眼底写真とOCT像を別図41A, 41Bに示す。
適切な対応はどれか。
a 経過観察 b 硝子体手術 c SF₆硝子体内注射
d 抗VEGF薬硝子体内注射 e 副腎皮質ステロイド硝子体内注射

- 42 40 歳の男性。工事現場で作業中、左眼に鉄骨が当たり受傷した。眼球破裂を認めたため緊急手術を施行した。手術開始時の手術顕微鏡写真を別図 42 に示す。
手術で正しいのはどれか、2 つ選べ。
- a 角膜縫合は避けコンタクトレンズを使用する。 b 局所麻酔を選択する。
c 虹彩はできる限り切除する。 d 結膜は必ず切開する。
e 水晶体は摘出する。
- 43 56 歳の男性。3 日前からの右眼の霧視を訴えて来院した。視力は右 0.7(矯正不能)。右眼眼底写真と蛍光眼底造影写真を別図 43A, 43B に示す。
適切な対応はどれか。
- a 経過観察 b 硝子体手術 c レーザー光凝固
d 抗 VEGF 薬硝子体内注射 e 副腎皮質ステロイドテノン嚢下注射
- 44 35 歳の男性。LASIK 4 週後に左眼の眼痛と充血および視力低下を主訴に来院した。左眼細隙灯顕微鏡写真と培養塗抹標本写真を別図 44A, 44B, 44C に示す。
原因として最も考えられるのはどれか。
- a 緑膿菌 b カンジダ c ブドウ球菌 d 非定型抗酸菌 e クリプトコッカス
- 45 80 歳の女性。10 年前白内障で超音波水晶体乳化吸引術と眼内レンズ挿入術を施行した。最近、視力低下に気が付き来院した。前眼部写真を別図 45 に示す。
最も適切な治療はどれか。
- a このままダイアリングにて整復
b 眼内レンズのみを摘出+前房レンズ挿入
c 眼内レンズのみを摘出してそのまま嚢外固定
d 眼内レンズのみを摘出+眼内レンズ毛様溝縫着
e 眼内レンズを水晶体嚢ごと摘出+眼内レンズ毛様溝縫着
- 46 75 歳の女性。右眼水疱性角膜症に対して角膜内皮移植術(DSAEK)を受けた翌日の前眼部写真を別図 46 に示す。
治療で適切なのはどれか。
- a 前房内空気抜去 b 前房内空気注入 c 層間前房水抜去
d アトロピン硫酸塩点眼 e ピロカルピン塩酸塩点眼
- 47 50 歳の男性。右眼の色調異常に気が付き来院した。右眼前眼部写真を別図 47 に示す。網膜剝離に対する硝子体手術を受けた既往がある。
前房上方にみられるのはどれか。
- a 白血球 b 虹彩嚢胞 c コレステロール
d 乳化シリコンオイル e 液体パーフルオロカーボン
- 48 72 歳の女性。右眼の視力低下で来院した。視力は右 0.03(0.1×-14.00 D)、左 0.05(0.9×-10.00 D)。右眼眼底写真と OCT 像を別図 48A, 48B に示す。
適切な治療はどれか。
- a 光線力学療法 b 抗 VEGF 薬硝子体内注射 c 硝子体手術
d 硝子体内ガス注入 e 副腎皮質ステロイドテノン嚢下注射
- 49 9 歳の男児。学校健診で左眼の視力低下を指摘された。視力は左 0.3(矯正不能)。左眼眼底写真を別図 49 に示す。
適切な治療はどれか。
- a 網膜光凝固 b 強膜開窓術 c 硝子体手術 d 網膜冷凍凝固 e 光線力学療法

50 65歳の男性。2か月前から左眼の視力低下を自覚して来院した。視力は右1.0(矯正不能), 左0.2(矯正不能)。左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真およびインドシアニングリーン蛍光眼底造影写真とを別図 50A, 50B, 50C に示す。

適切な治療はどれか。2つ選べ。

- a 光線力学療法
- b 硝子体切除術
- c レーザー光凝固
- d 硝子体内ガス注入
- e 抗 VEGF 薬硝子体内注射